

## 大串明弘作「主を恐れることは」

<前編>

鬼塚先生

おい、そこ！お前ら何やってんだ！

徳川一<sup>はじめ</sup>

え、おれ？

鬼塚

徳川、今お前、武田に何か渡したろう？お前ともあろうものが、カンニングの手伝いか？

一

そ、そんなことしてません。さっき武田君が消しゴムを落としたのを見たんです。それで、消しゴムを貸してあげようと…。

武田悟

(かぶせて)本当です、先生。あそこに僕が落とした消しゴムが…。

鬼塚

(かぶせて)何が消しゴムを落としただ！お前らのような優等生のことだから、万が一のために、前もって消しゴムを落としておいたんだらう？

一

そ、そんな…。

鬼塚

とにかく、お前らの解答用紙は没収だ。(効果音)(紙を取る音)2人とも、次の休み時間に職員室に来なさい。

ナレーション

おれの名前は徳川一。青春中学3年生。そう、受験生だ。自分で言うのもなんだが、成績はいつも1、2を争っている。学習態度もよいし、文字通りの優等生だ。推薦で入れる高校はやめて、全国で最もレベルが高いと言われている高嶺高校を目指して頑張っている。それにしてもマズい…。もしこのテストがカンニング扱いになってしまったら、内申書に書かれて傷が付いてしまう。そんなことになったら、本命の高嶺高校がパアになってしまう。何とかしなければ…。

(効果音)

(学校のチャイム)(ガヤ)

一

おい、悟！お前、何でも言い訳しなかったんだよ！これでほんとにカンニング扱いになったら、どうすんだよ！

悟

…うん。でも、ああいう先生には、言い訳してもしょうがないよ。神様はすべてを知ってるから。

一

悟、お前、クリスチャンだからって、そんなのんびりしたこと言ってる場合かよ。高校がかかってんだぞ！お前だって高嶺高校目指して頑張ってきたじゃないか。お前、夏休みに行った、塾の特別合宿をもう忘れたのか？

悟

いや、忘れられないよ。でもな、おれ最近、ふと思ったんだ。あんな合宿行かないで、教会のキャンプに行っ、自然の中で伸び伸びしたほうがよかったのかなって。

ナレーション

そう、悟は、中2の時に、おれも昔一緒に行っていた教会で、洗礼を受けてクリスチャンになったらしい。それ以来、どこと言って変わったところはないが、

何となく、物事に動じないって言うか、落ち着きが出てきた。もともと、何かって言うと聖書を持ち出して、教会に誘われるのには参るけど。

鬼塚 (効果音)(フィルター)3年A組の徳川、武田。至急校長室まで来なさい。繰り返す。3年A組の徳川、武田。至急、校長室まで来なさい。

悟 とりあえず早く行こう。校長先生にちゃんと事情を説明すれば、分かってもらえるよ。

ナレーション 何か嫌な予感がした。というのも、昨日あった地震で、家の神棚に載っていた合格祈願のお札が、全部落ちていたのだ。

(効果音) (ドアをノックする音)

一、悟 失礼します。

鬼塚 校長先生、先ほどのテストカンニングをした生徒たちです。

校長先生 君たち、カンニングをしたというのは本当かね？

一 いいえ！ 僕たちはカンニングなんてしていません。彼が消しゴムを落としてしまったのを見て、それを貸してあげただけなんです。

校長先生 本当かね、武田君？

悟 はい、本当です。

鬼塚 お前ら、うそもいい加減にしろ！ 証拠はあるんだぞ！ これだからおれは、お前らみたいな優等生は嫌いなんだ！ 頭のいいやつは、悪知恵ばかりついて全くどうしようもない！ ほら、これを見ろ！

(効果音) (紙を渡す音)

一 …これは僕の解答用紙ですが…これがどうかしたんですか？

鬼塚 これが武田の解答用紙だ。

(効果音) (紙を渡す音)

一、悟 あ…。

ナレーション おれたちの解答用紙には、同じところに1箇所マーカーが付けられていて、その答えは明らかに間違いだった。

鬼塚 徳川、武田。どうしてお前たちだけ、同じところを間違えているんだ？ 説明してみろ。

一 こ、これは… 僕たち、テストの前に一緒に勉強してたんです。ところが、この問題だけ間違えて覚えちゃったんです、きっと。それしか考えられません！

鬼塚 お前らでも、そんな子供だましの言い訳しかできんのか。お前たちも年貢の納め時だな。

校長先生 わたしも君たちを信じたいのは山々だが、監督の先生がカンニングを見たというからには、罰せざるを得んな。2人ともこのテストに限り、0点として、不正行為と思われる紛らわしい行為があったと記録しておくことにする。

一 そ、そんな…。 “記録する” ってことは、内申書に書くということですか？

鬼塚 当たり前だ。そんなことも分らないのか。

校長先生 君たちにひとつ聞きたいのだが、君たちはなぜ勉強するのか考えたことがあるかね？

一 なぜって、それはいろんなことを知って、知識を得るためでしょう？

校長先生 荘か。では、知識を得てどうするのかね？

一 どうするって、よい高校へ進学して、よい大学へ進学して、一流の会社に就職し、人より早く出世するためですよ。だからこうして必死に勉強してるんです。

校長先生 なるほど。だが勉強は、そしてそれから得る知識は、人生を豊かに生きるためにこそ必要なのではないかな？ 学校も本来そういった目的のために作られたはずだ。幸福な人生を歩むために、必要な勉強とは何か、知識とは何かを、今こそ君たちによく考えてほしいな。

(効果音) (教室のガヤ)

女子 ねえねえ、で、どうだったの、呼び出し？

一 どうもこうもないぜ。結局おれたちは“有罪”。テストは0点で、内申書に書かれるとき。

女子 ウッソー。マジ？

一 ほんとに、もうやってらんねえよ。それに悟は何も言ってくんねえしよ。

悟 ああ、お前にだけ弁解させて悪かったな。でもあんなときは、心の中で祈ることにしてるんだ。それに、校長に言われたことも気にかかって。

一 ああ、勉強の意味は何かとかってんだろ？ そんなこと、考えてる余裕なんかねえよ。何が何でもあの内申書を取り消してもらわなきゃ。とりあえず、おやじに頼んでみるよ。おやじから言ってもらえば何とかなるかもしれない。何しろうちのおやじは、あの学校にいっぱい寄付してるらしいからな。また寄付でも持って行って頼んでくれば、チョロいんじゃないの？ (笑い) やっぱり世の中は金だよな。

悟 でもさ、やっぱりあの校長先生の言葉、気になるよな。何のためのちしきか…。

一 何言ってんだよ。今、一生懸命勉強して、よい学校を出て、よい会社に就職して、出世して、うちのおやじみたいに社長になって、何不自由なく幸せに暮らすためだろ？ それだけじゃん。

悟 一、お前、ソロモン王って知ってるか？

一 何だよ、いきなり。ははあ、またお前、聖書の話だな。ソロモン王？ どっかで聞いたことあるけど。それが何だ？

悟 ソロモン王っていうのは、イスラエルの昔の王様で、神様から最高の知恵と富を与えられた人なんだ。その人が書いたものが、聖書の中にあんだけど、

最初にこういう言葉があるんだ。「主を恐れることは知識の始めである。」

一 “シュ”って何？

悟 ああ、主って言うのは、神様のことだよ。

一 “恐れる”って、怖がることかよ。それならおれもそうだ。昨日の地震でさ、神棚のお札がみんなおっこっちゃってさあ。そのたたりじゃないかと思ってんだよ。

悟 いや、そうじゃなくて、恐れるっていうのは、うまく言えないけど、敬って従うっていうような意味かな。

一 てことは、“神を敬って従うことが知識の始め”ってこと？ 何だか訳分かんないことを言ったもんだな、ソロモン王って人は。おれの知識の始まりは高嶺高への入学だよ。じゃ、またあしたな。あんまり気を落とすなよ。

悟 お前もな。親の力よりも実力で行こうよ、一。お前の分も神様に祈るから大丈夫だよ。じゃあな！

(効果音) (ドアの開閉音)

ナレーション おれは悟ると別れると、家に急いだ。頭の中では、何と言って父に話そうかと、必死に口実を考えていた。

(効果音) (ドア音)

一 ただいまあ。あれ、だれもいないの？…何だ、みんないるじゃん。どうしたの？

ナレーション リビングには、大学生の姉と母、それにいつもは夜遅く帰ってくる父が、無言でソファに座っていた。何だか重苦しい空気が張り詰めている。

一(モノローグ) 何だろう。もう今日のことがバレちゃったのかな。

母 あ、一。実はね、父さんが… 父さんが、会社を辞めさせられたのよ。(泣く)

一 え？ 父さんが？ 社長なのに…。どうして？

(音楽) (ショッキングで暗い感じ)

ナレーション おれの頭の中は、突然真っ白になった。

#### <後編>

母 バブルがはじけてから、お父さんの会社は赤字経営でねえ。今までは何とか不景気のせいということで済んでたんだけど、とうとう、業績の悪化はお父さんのせいだという人が多くなってきて…。責任を取る形で、今日の取締役会で辞めさせられたのよ。

一 で、でもさ、父さんのことだから、退職金が結構出るんだろう？

母 それが… 社員も幹部も給料遅延や減配で頑張ってるのだから、協力してもらいたって、一銭も出ないのよ。これからどうやって暮らしていったらいいのか(泣く)。

一 そんな。退職金が出ないってどういうことだよ。おれたち、どうなるんだよ、父さん。もっと頑張れば…。

父 いちいちうるさい！ 出ないものは出ないんだ！ お前も少しは人の気持ちを考えたらどうだ！

一 父さんだって、おれの気持ちも考えてくれよ！ うちが貧乏になったら、高嶺高校に行けなくなるかもしれないんだから！

父 お前の学費ぐらい何とかするから、そんなに心配するな。

一 でも学校に寄付するお金はないんだろう？ それじゃダメなんだよ！ 高嶺に入れないんだよ！

(効果音) (一が階段を足早に上っていく音)

父 (追いかけるように)おい、一、それはどういうことだ？

母 (階下から)一、一ちゃん！

一 チクショウ！ どうなってんだよ。何でこうツイてないんだよ！

ナレーション おれは神棚に載っかっている合格祈願のお札を取った。

一(モノローグ) やっぱり神様のたたりかな。お札が落っこちたのがいけなかったんだろうか。…いや、違う。地震で落っこちてしまう、こんなお札の中に神様がいるはずがない。だったら、おれは一体何に頼ったらいいんだ？

ナレーション そのとき、ふと校長先生に言われた言葉を思い出した。

校長 (効果音)(エコー) 幸福な人生を歩むために、必要な勉強とは何か、知識とは何かをよく考えてほしいな。

一(モノローグ) そうだ。おれは将来幸せになるために必死に勉強してきたんだ。おやじみたいに社長になって、何不自由ない生活をするために。でも、そのおやじが、あんなっちゃうなんて。あれでおやじがしてきた勉強は、おやじを幸せにしたと言えるのか？

ナレーション おれは、波のように押し寄せてくる、たくさんの疑問から逃れるように、がむしやりに勉強した。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション やがて年も明け、本命の高嶺高校の受験日は、翌日に迫った。おれは放課後塾へ行き、最後のアドバイスを受けて帰ってきた。

一 ただいま。

(効果音) (階段を下りてくる音)

姉 お帰り。

一 ああ、姉さん。母さんはどこ行った？

姉 お母さんはね、前から入院していた敏子伯母さん、ほら、お父さんの姉の。その伯母さんが亡くなっちゃって、お通夜の準備に行ったわよ。あんたには悪いけど、今晚は帰れないって。

— ええ!? で、父さんは?  
姉 お父さんも一緒に決まってるでしょ。お父さんの姉さんだもの。頭よいくせに、そんなところは鈍いんだから。

ナレーション その晩は、外へ出ると風邪を引くからという理由で、外食は避け、姉に買ってきてもらった“ほか弁”を食べ、早めに床に入った。

—(モノローグ) 明日、寝坊しないかな。姉貴はちゃんと起こしてくれると言ってたけど、大丈夫かな。でも、試験はうまくいっても、あのカンニングの件で、結局ダメなんじゃないかな。

ナレーション いろいろな不安が次々と出てきて、遅くまで寝付けなかった。  
(効果音) (スズメがさえずる音)  
(効果音) (激しくドアをたたく音)

姉 —! 起きなさい! —! —!  
— は! …まだ3時? 何かヘンだぞ。

ナレーション 外はもう明るいというのに、目覚まし時計はまだ夜中の3時だ。まあか、と思い腕時計を探した。

— ええ? もう7時じゃないか!  
ナレーション おれは文字通り飛び起きた。7時に家を出なくちゃいけなかったのだ。  
— 何で起こしてくれなかったんだよ!  
姉 夜中に停電があったらしくて、目覚ましの電源が切れちゃったのよ。  
— まったく、何でこうなっちゃうんだよ!  
ナレーション おれは受験票と筆記用具を確認すると、急いでバス停に走った。高嶺高校までは普通バスで約30分だ。

—(モノローグ) 間に合うかな? 試験は8時からだろう? それまでに着けば何とかなるんだけど、こう道が込んでちゃ間に合わないよ。ああ、神様、助けてください!  
ナレーション 思わず祈りが口をついて出た。8時まであと3分というところで、試験場の最寄りのバス停に着いた。おれは全速力で試験場へと走った。校門の手前で、男の人にぶつかってしまったが、おわびを言う暇もなくそのまま突っ走った。

—(モノローグ) (荒い息遣い)あそこだ、あそこが試験場だ!  
(効果音) (学校のチャイム)  
—(モノローグ) ウソだろう?  
ナレーション もう少しというところで、チャイムが鳴ってしまった。もう少しというところまで来て、ダメ元で試験場へ行ってみたが、試験官には冷たく断られた。おれはまだ肩で息をしながら、校門へ歩いていった。もう頭の中は真っ白で、何も考えられなかった。校門を出ると、男の人が道行く人に、チラシのようなものを手渡していた。よく見ると、さっきぶつかった人のようだった。

林さん おはようございます。どうぞ読んでください。

ナレーション その人は優しそうな笑顔でそう言うと、おれにも1枚くれた。

林 失礼ですが、もしかしてあなたは、さっきぶつかった人ではありませんか？

一 ええ。さっきはすみませんでした。急いでいたもんですから。

ナレーション そこへ数人、受験生らしいのが、息せき切って駆け込んできたが、驚いたことに、その中の一人は武田悟だった。

悟 (息を切らして) やっぱりに間に合わなかったか。あれ、一？ お前も試験間に合わなかったの？ あれ、一？ お前は試験に間に合わなかったの？

一 さ、悟、お前…。

悟 あれ？ 林先生じゃないですか？ 今日は受験生をねらってトラクト配布ですか？ あ、先生、こいつが、例のクラスメートの徳川一です。小学生の時から親友で、小さいころは教会学校に行っていたんです。一、こちらは教会学校の先生をしている林さんだ。お前のことを話して、祈ってもらってたんだ。

林 君が一君か。こんな所で3人一緒に会うなんて、奇遇だね。

一 でも悟。お前までどうして遅れたんだよ。

悟 ああ、途中で交通事故があつて、すごい渋滞に遭つてさ。でも、これも神様のご計画だと思って、やっぱりこれは公立でいくよ。

一 それでいいのかよ。お前、ここにすぐ入りたがってたじゃんか。ここには入るために、あんなに勉強したんだらう？

悟 前はそうだった。でもおれ、あれから考えたんだ。ほら、校長先生に言われたらう？ 何のために勉強するのか考えろって。で、こちらの林さんに相談したりして、自分なりに考えてみたんだ。

林 わたしは今年で40になるのですが、数年前まで塾の講師をしていました。勉強の目的など考える暇さえ与えずに、ひたすら生徒に勉強をさせ、いい学校に合格させていました。もちろん、自分もその時はそれに何の疑問も持っていないませんでした。それどころか、それが子供たちにとって最善だと考えていたんです。ところがある時、全く勉強嫌いの女の子が入塾してきました。偏差値もかなり低かったので、かなりハードに勉強させました。そのお陰で、一応上位レベルの学校に入れたのですが、それからしばらくして、その子は自殺してしまつたんです。わたしは大きなショックを受けました。そして分かつたんです。今のように、学問や知識を詰め込むだけでは、人は幸福になれないんだ。わたしは間違っていたって。そう思うと、死んだその子にも、みんなにも申し訳なくて、泣きながら祈っていた時に、一つの言葉を神様から頂きました。「主を恐れることは、知識の始めである。」その時思いました。人を幸福にするのは、人間をつくられた本当の神様を知り、敬い、従うことなんだ。それが知識の最も大事なことなんだって。

悟 林先生はね、塾を辞めて、今は宣教師になるために神学校へ行ってるんだ。

文盲率のまだまだ高い発展途上国の子供たちに、本当の教育をするためにね。

ナレーション 林さんの話は、おれの心の中に染み込んだ。まだおれには、なぜ勉強するのか、本当に大事な知識とはなんなのか、よくは分からない。でも今まで自分で敷いて、しゃにむに突っ走ってきたレールから脱線して、妙に心の中がすっきりしていた。

モノローグ 「主を恐れることは、知識の始めである」か。脱線したついでに、この言葉が本当かどうか、おれも悟たちの教会に行って確かめてみるか。

ナレーション 2人の明るい横顔を見ながら、おれは心の中でそうつぶやいていた。

(完)